

# 最新事情

検定合格で自信を付け  
成長してほしい

## 植草学園大学附属高等学校

(千葉県千葉市)

植草学園大学附属高等学校の普通科レギュラークラスでは、勉強や部活、検定取得など充実した高校生活をサポートし、幅広い進路に対応できるようバランスのよいカリキュラムを用意している。特に課題研究では秘書検定を導入し、社会に出てから必要な基本的なマナーの習得にも力を入れている。秘書検定の導入を中心に学習の様子を伺った。

### 合言葉は You can do it

植草学園は明治37の創立以来、時代の要請に従い、服飾や保育・福祉そして近年は教育や医療の分野で活躍する人材を輩出してき

た。現在、その伝統は植草学園大学をはじめ、短期大学、附属高等学校が受け継いでいる。植草学園大学附属高等学校では国際理解の教育にも力を入れており、平成2年に英語科を設置。国際理解プログラムとして、全生徒によるアメリカへの修学旅行を実施したり、ネイティブの教員による授業を行っている。

このように幅広い指導を行っている同校。教育の根幹に掲げているのは、創設当初から

変わらない「德育教育」だ。同校では德育教育を、「こころの教育」と捉え、「人を思いやったり、人の役に立つことに喜びを感じるような人間味のある人材の養成」を目指している。その成果もあり「植草学園大学附属高校の生徒は礼儀正しくまじめ」と外部からの評判が高く、在校生の雰囲気を見て入学を決める生徒が多いという。その反面、「自己肯定感が低い子どもが増えている」と話すのは、植草完校長である。

「多くの生徒と接してきて感じるのは、自分のことを語るときに『私は学力が低い』とか『運動が苦手』などと言って、自分をあまり認めようとしないことです。ですから、まずは挑戦する機会を与え、自信を付けさせることが必要だと感じています。我が校の合言葉は『You can do it——やればできる、君ならできる』です。何事にも積極的にチャレンジしてほしいという思いを込めています」(植草校長)。

普通科にはタイアップクラスとレギュラークラスがある。タイアップクラスは教育分野(小学校教諭、幼稚園教諭)・医療分野(看護師、理学療法士など)・福祉分野(保育士、介護福祉士など)への進学を希望する生徒が所属している。このクラスでは植草学園大学、短期大学との高大連携で「タイアップ講座」などを実施しており、大学教員による講座や、大学の授業見学などを行い、生徒の職業観を



植草学園大学附属高等学校

養っている。

レギュラークラスは、進学だけでなく就職にも対応できるカリキュラムを用意し、日々の学習や部活動に取り組みやすい環境を整えている。また、同クラスでは検定資格に積極的に挑戦することを推奨しており、特に英語検定と秘書検定は全員が受験する。

秘書検定の指導は2年生の「課題研究」で行っている。木村昌代先生は、秘書検定を導入している理由についてこのように話す。

「理由は二つあります。一つはビジネスマナーはどの分野の職業に就いても必要な知識だから。もう一つはモチベーションを高く



植草完校長



秘書検定の指導を担当している  
木村昌代先生

持って学習に取り組めるからです。検定試験に受かったときに達成感も味わうことができ、もっと上達したいという気持ちも芽生えます。秘書検定はこの両方を実現できるので、以前から授業に取り入れ指導していました」。

### 日常と関連付けできれば 興味を持って学習できる

秘書検定3級の指導は2年生の4月から10月までの半年間で行う。最初の授業では、生徒から「秘書にならないのに、なぜ秘書検定を受験しなければならないのですか?」と聞かれることがあり、消極的な声が多いという。そのためいきなり秘書検定の内容に入るのではなく、導入として「秘書とはどのような職業か」「どのような仕事をしているか」などを示し、その中から一般の会社で行われている電話応対や来客応対などを抜き出して、自分の将来とどのように関連するかイメージしやすくしている。

「秘書と言っても、特別な業務ばかりしているわけではありません。電話を取り次いだり、お客さまを案内することは、どの会社でもやっていることです。秘書の仕事内容からそうした業務内容を抜き出し、自分にも関係あるんだと気付きを与えています」(木村先生)。

その後、生徒同士で上司と秘書、お客さまと受付など、それぞれの役になりロールプレイングを行う。座学の前にロールプレイング

をしてみることで、生徒たちはビジネスマナーの難しさを実感する。そうすると、「なぜこうするのか」という興味が湧き、座学にも集中しやすくなるそうだ。

使用しているテキストは『新秘書特講』(早稲田教育出版社)である。同書は3級と2級の審査基準を基に構成されているため、高校生には難しい内容も含まれているが、「例えば祝儀袋の種類を教えるときには、実物を見せると記憶に残りやすい」と木村先生。具体的な指導法を教えてもらった。

「祝儀袋一つとっても何種類もありますから、テキストだけでは覚えにくいのです。ですから実物を幾つか持っていていき、生徒に触ってもらいます。そうすると『こっちの方が紙が厚い』『ちよつとでこぼこしている』など、さまざまな感想が挙がります。その後、それぞれの祝儀袋の使い分けや記名の仕方、送り方などを解説します。その中で『なぜお金は普通郵便で送っては駄目なの』など新たな疑問も生まれ、生徒たちは興味を持って授業に聞き入ります。このように、一方的に講義するのではなく、生徒が自ら知りたいと思えるような授業にするよう心掛けています」。

この他、生徒が大きな興味を示すのがお茶の入れ方である。

「最近よく聞くことですが、家ではペットボトルのお茶を飲む家庭が多く、一度もお茶を入れたことがない生徒がほとんどです。とは

言え、会社では今でもお茶を入れてお出しするところが多いと思います。茶器の名前を覚えることはもちろんですが、お茶の入れ方や、急須で入れたお茶の味を知っておくことも大切です」。

実際にこれらの授業を体験した生徒の反応はどうか。昨年の課題研究で秘書検定を学んだ、3年生の宮西李果さんと松浦有沙さんに話を聞いた。

祝儀袋の授業を振り返り「祝儀袋にはいろいろな種類があるだけでなく、六曜の基準に従って贈ることを知りました」と話す宮西さん。松浦さんは「複数で贈るときの記名の仕方を学び、社会人になったときに使えそうだと思います」と話す。他にも敬語の使い方やビジネス文書の書き方など幅広く学べたと話し、「秘書検定で学んだビジネスマナーは社会に出たときにきつと役立つ。普段の生活から心掛けたい」と宮西さん。松浦さんは「先日、大学受験の願書を送ったのですが、封筒に『御中』と付け加えて出すことができました。意識して使ってみることが大切だと思います」と成果を語ってくれた。

二人は秘書検定2級に合格。松浦さんはその後、準1級の筆記試験に挑戦した。受験した感想を尋ねると「2級より問題の設定は複雑で解くのが大変だった」と難易度の高さに戸惑ったというが、「社会で必要な知識を学べてよかった」と最後は笑顔で答えてくれた。

## 社会人になって差が出る 秘書検定での学び

授業では秘書検定の受験対策のために、過去問題やミニテストを実施している。この二つによって覚えた知識がどのような問題形式で出るのか、どのような場面で活用できるのかがつかみやすくなるという。

「ミニテストでは、穴埋め問題を出したり、テキストの内容を要約させたりしています。暗記だけでなく、自分で考えて答えられるように工夫しています」(木村先生)。

木村先生は秘書検定の指導に携わって3年がたつ。秘書ビジネス実務教育担当者地方研究会や秘書サービスマネジメント教育学会に参加し、熱心に指導のヒントを探っている。「まだまだ授業は試行錯誤しながら進めています。ビジネスマナーは覚えておいて損はない知識。少しでも吸収してほしいという思いで指導しています」と木村先生。「極端に言ってしまう、お茶の入れ方が分からなくても、屋内にいるのにコートを着たままでも、高校生のうちは全く困りません。ですが、社会人になったときに恥ずかしい思いをするのはやっぱり自分自身。小さなことですが、やがて大きな差になります。そのようなことを秘書検定で学んでくれたら」と続ける。

今後の指導に向けて木村先生はこう話す。「知識の習得はもちろん、秘書検定に合格す

る生徒が増えるようにしていきたい。合格をきっかけに自信を付け、さらに学びを深めていってほしいと思います」。

植草校長も期待を込めてこう話す。「繰り返しになりますが、部活動に励んだり検定に挑戦することは、自信を付ける一つのきっかけになります。本校で多くの成功体験を積んで、成長していつてほしいですね」。「You can do it」を合言葉に、生徒たちのチャレンジ精神は一層育まれていくことだろう。



(左から) 松浦有沙さんと宮西李果さん。松浦さんは準1級の筆記試験に挑戦した